

2009 年前期

1)

世帯収入と相対死亡率が反比例している。これは、収入が多ければ健康によい食品、病気の予防や治療に費用をかけて健康を維持しやすいのに対し、収入が少なければそれらに十分な費用をかけられないことを示していると考えられる。

2)

図 1 と図 2 から、一般的に収入が多いほど、また組織内での地位が高いほど死亡率が低いことがうかがえる。組織内での地位が高い管理職は収入面で恵まれているので、「健康はお金によって保たれる側面がある」という一般論が導かれるだろう。そして、この傾向は日本にも当てはまると考える。なぜなら、日本では終身雇用制や年功序列賃金という労働慣習が崩れ、現在はパート、アルバイト、派遣労働などの非正規労働者が 1800 万人、労働者全体の 3 分の 1 を占めるまでになっているからだ。また、現在、為替の円安傾向から大企業は景況感が改善している一方で、中小企業は長引く不況から抜け出せていない。大企業と中小企業、正規と非正規という形で格差が益々広がっているとされる。そして、低賃金やサービス残業を強いられ、不安定な雇用形態から強いストレスを受けている労働者が増えている。このような格差は健康の格差になって顕在化していると思う。非正規労働者は、低賃金からバランスの悪い食事や運動不足など健康にとってマイナスの生活習慣を強いられるからだ。私は、まずヨーロッパで普及しているような同一労働同一賃金という考え方を日本でも普及させ、非正規労働者の収入を底上げする仕組みを構築していくべきだと思う。そして、最低限度の収入を保障した上で成果や責任に応じて賃金を上乘せする制度を作っていくべきだ。長い目で見ると、それが健康格差の解消につながると考える。

1)

生命とは代謝の持続的変化のことであり、この変化こそが生命の真の姿であるという生命観。これまでは、生命は個物として存在し、必要な栄養物を取り入れ、余ったら蓄えるという固定的な生命観だった。しかし、肉体は外界と隔てられた個物ではなく、肉体を構成する分子は常に高速で入れ替わっていることが判った。この分子の流れ自体が「生きている」ことを意味する。

2)

私たちの体が分子レベルで入れ替わということは、「ヒトの体そのものが自然を反映した小環境である」という視点につながる。このような生命観に立つと、これまでの環境問題への取り組みはヒトの中の環境と外部の環境を別個のもののみなして、不十分なものに思えてくる。なぜなら、ヒトが

撒き散らした農薬や排気ガス、放射性物質は自然界で循環し、一時的にせよヒトの体を構成することを意味するからだ。例えば、農薬が分解しきれずに体内に取り込まれるとき、他の分子にどのような影響を与えるだろうか。想像すると、身震いするほどだ。もちろん、地球の温暖化防止や有害物質の放出規制などの取り組みはなされている。また、健康を維持し、いまの生活を続けるために、環境に必要最小限の負荷をかけることは容認されるかもしれない。しかし、その場合でも私たちはヒトが自然を支配できる、環境を思い通りに改良できると考えるべきではない。ヒトも自然の一部であるという観点に立てば、ヒトと地球環境が直接関係し、つながっているという当事者意識が芽生えてくるだろう。そして、そこからはヒトが地球環境を自分の住む家や家族、自分自身と同じように大切に思う態度が生まれてくるに違いない。